

「雲南の春」(映画「うん、何?」の一場面から)



## うん、何? これ…と驚かれる日本、そして島根

映画「うん、何?」は、実はしまね映画塾から生まれたのをご存じだろうか。木次での塾生作品をご覧になった市民の皆さんからの声があきつかけだ。そして雲南市の多くの皆さんの大協力によって完成。以前から雲南地方には興味があつたのだが、塾の開催によって隔々まで見て歩く機会を得、あらためて雲南の魅力に打ちのめされ、八岐大蛇(やまたのおろち)伝説をモチーフに雲南市の高校生を主人公にした脚本を書いた。大蛇が呑(の)んだときの壺(つぼ)が祀(まつ)られているという壺神様も登場するが、ぜひお参りいただきたい。

雲南市はもとより、旧頓原町や赤来町、仁多町、横田町なども含めて出雲の南、いわゆる「雲南」は、本当に面白く興味深いモノがたくさんある所である。

## 映画の現場から

錦織監督



## 「等身大の日本」を発信

●●14

映画「うん、何?」がパリで上映された際の舞台あいさつどきに飛んできた質問は「様に島根は日本のどこにあるの?」というもの。さらに島根の住民の等身大の生活に興味津々だったようだ。以前から書いているように、私は東京発の情報が大都市圏の文化や考え方に偏る傾向にあると思っっているが、加えて映画や漫画などのビジュアルコンテンツも侍の時代のモノが多いこともあり、国外でのイメージは京都や奈良、お寺やお寺、着物になってしまふのかもしれない。

フランス最大の日本映画祭、キノタヨ国際映画祭は普通のフランス人より、日本に造詣の深い観客が集まっているはずだが、映画「うん、何?」の中の「2000年以前から…」という台詞(せりふ)には随分反応があつた。まさか以前からずっと侍の時代だけと思っていたワケではないだろうが、歌舞伎や酒、相撲などの発祥の地であること、スサノオノミコトなどの神話や古事記の話になると身を乗り出してきた。

ロビーで旅行ガイドブック「ブルーガイド」のベテラン記者の質問を受けたのだが、それでも足りないとはかりにパリ島根県人会(何とパリに島根県人会があり、約10人の皆さんに駆けつけていただいた)の皆さんと一緒にエッフェル塔近くのカフェでインタビューの続きを受けた。そして今度、雲南に足を伸ばしてみたいと熱く語ってくれた。通訳で関わっていた青年が「日本人はフランスの町並みを見に来るが、自分では中世の作り物より大自然が好きだ、とりわけ日本の四季や自然を大切にす文化や繊細な風習に憧れる。水もきれいだからいつか日本に住みたい」と熱く語っていたのが印象的だった。

「どうやら「うん、何? これ!」と驚いていただけようだ。

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載